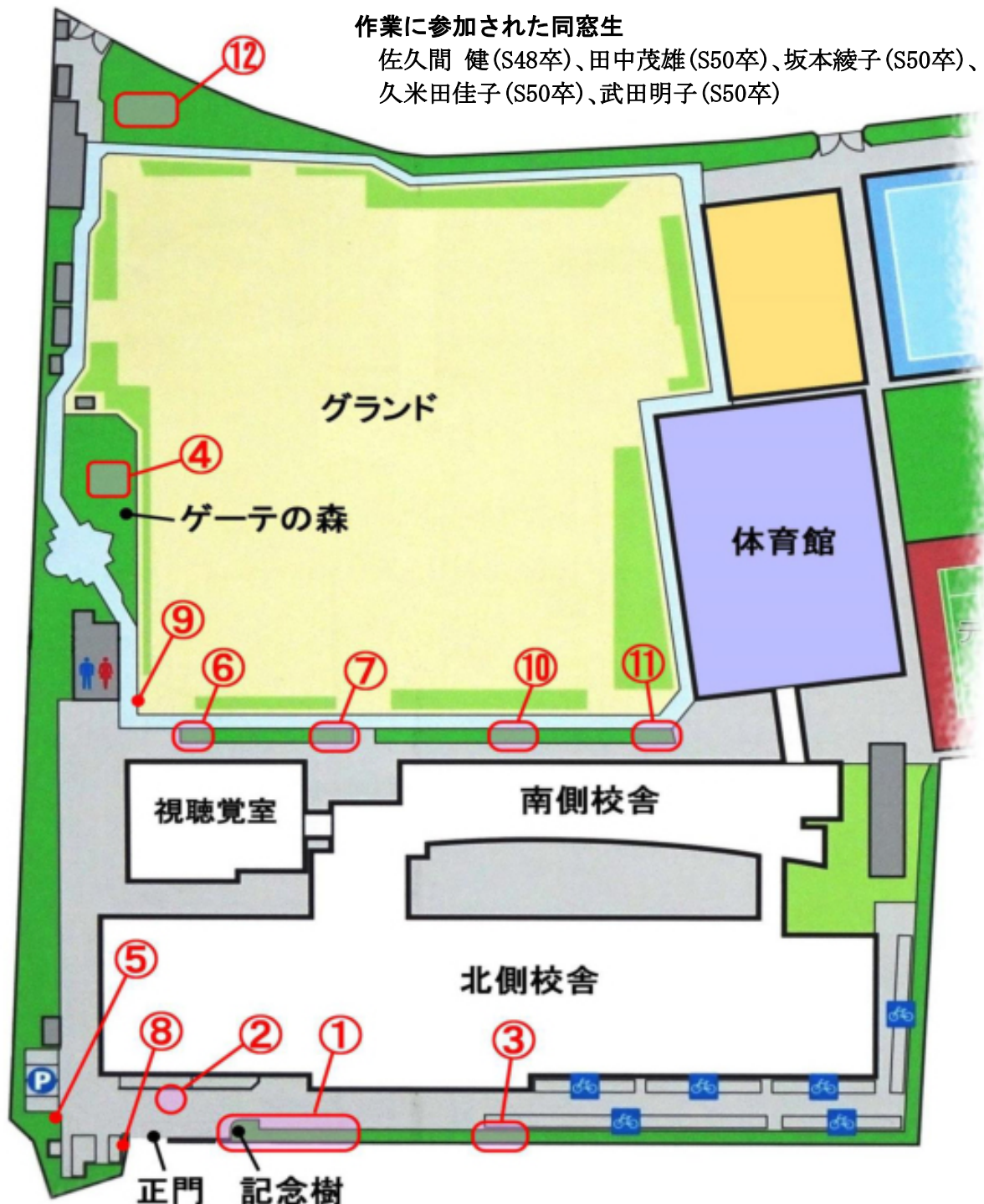


4. 校内整備・緑化支援(7月～12月)

今年の夏も苛酷な猛暑でしたが、役員や同窓生達によって校内の様々な場所の花壇やプランターへの草花植付けや花壇整備が行われました。今年後半の主な学校行事の鷺高祭(9月6日,7日)では、下記地図の裏門近くの⑫に造成した畑で収穫したミニトマトや枝豆の提供を企画していました。しかしながら、思いのほか生育が早く、残念ながら学校の夏休み中に収穫を終えてしまいました。今年7月～12月の緑化支援の作業による花壇や畑などの様子を次頁以降に写真で紹介します。(写真の日付は撮影日です)

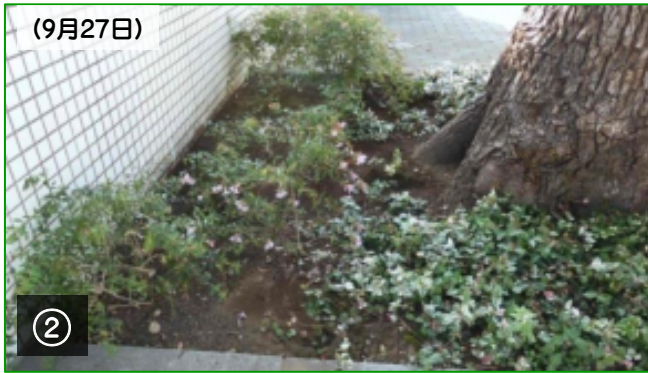
作業に参加された同窓生

佐久間 健(S48卒)、田中茂雄(S50卒)、坂本綾子(S50卒)、
久米田佳子(S50卒)、武田明子(S50卒)





記念樹を植えた正門横の花壇は、役員と同窓生達により特に力を入れて整備しています



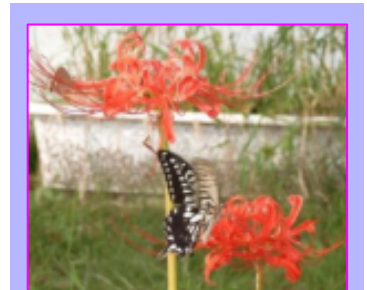
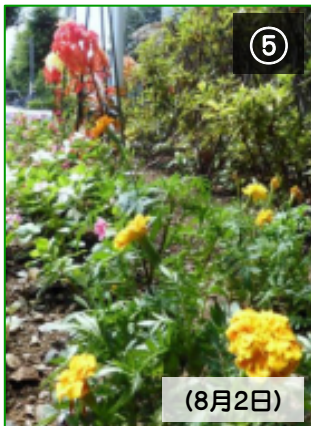
田中氏(S50年卒)が整備を続けている正門前の楠木下の花壇



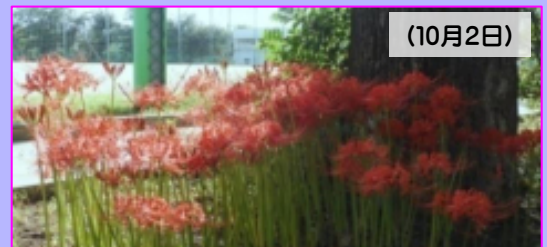
ハツユキカズラ



5月7日、10日に、サイエンス部の顧問の先生と生徒達によって、ゲートの森内にサツマイモ畑が造成されました。その後、順調に育ったサツマイモは秋には収穫されました。



在学中に亡くなった女子学生の保護者から、昭和36年に寄贈された大木(ユリノキ)の下では、自生していた彼岸花が満開に。





今年の春、裏門横の空き地が用務員さんの尽力で開墾された為、試験的に畑(幾つかの畝)を造成し、ミニトマト、枝豆、サツマイモなどを作りました。ミニトマトは3株しか植えませんでした、大量に収穫できたので、部活の生徒さん、教職員の方々にお裾分けしました。



サイエンス部の生徒さん達とミニトマトを収穫



役員会での検討の結果、除草作業の効率化の為、右の写真中のような充電式の電動草刈り機を購入しました。まずは、畑周りの雑草の刈り取りを芳賀会長によって複数回実施して頂きました。購入に当たっては、5月の総会時以降に同窓生の皆様から賜った寄付金を活用させて頂きました。改めて感謝申し上げます。

5. 特別寄稿(大阪・関西万博に関わって)

準備段階からスタッフとして大阪・関西万博に関わった同窓生から、スタッフ業務を通じて感じたところを写真と共に寄稿して頂きました。色々と物議をかました万博ではありませんが、スタッフとして内側からみた万博の光と影を語ってもらっています。

* 寄稿して頂いた同窓生の氏名、卒業年はご本人の希望にて伏せさせていただきます

「混沌と熱狂のあとに」 ー大阪・関西万博が残したものー

夢洲(ゆめしま)を包んでいた熱気が去り、季節はすっかり冬へと変わった。2025年10月に閉幕した大阪・関西万博は、半年という限られた時間の中で、私たちにあまりにも多くの問いと記憶を残していった。

私はこの万博にスタッフとして関与する立場にあり、企画や調整、工程管理、関係主体間の合意形成等々、表に出ることはないが、制度と現場の間を行き来した。同時に、会期中には一人の来場者として夢洲の地に立ち、その光景を体感した。

～「本当に開催できるのか」から始まった祝祭～

開催前、大阪・関西万博を取り巻く空気は決して好意的なものではなかった。建設の遅れ、膨らむ費用、そして「そもそも今、万博なのか」という根源的な疑問。スタッフの立場としても、厳しい指摘に耳を傾けながら、構想と現実の間で揺れ続けた日々をよく覚えている。それでも、幕が明けて夢洲に人々が集まり始めると、空気は一変した。「行ってみたら意外と凄かった」との率直な一言こそが、多くの人の実感だったのではないだろうか。

～大屋根リングの下で感じた「つながり」～

会場に足を踏み入れた瞬間、視界を覆った大屋根リングの存在感は、やはり圧倒的だった。世界最大級の木造建築。その巨大な円環は、単なる日除けや構造物ではなく、分断されがちな世界を一つの輪で包み込もうとする意思そのもののようにも見えた。その下を行き交う、多国籍で多世代の人々。会場の至る所で愛嬌を振りまいていたミャクミャク。当初は「異様」、「意味が分からない」と評されたキャラクターが、会期の終盤には誰もがグッズを身につける存在になっていた光景は、この万博が持っていた不思議な「愛着の引力」を象徴していたように思う。



～技術は「展示」から「問い」へ～

大阪・関西万博は、「未来社会の実験場」を掲げた。その言葉は、行政文書では何度も繰り返されていたが、現場で目にしたとき、初めて実感を伴って理解できた気がする。動くガンダムの足元で見上げた未来。アンドロイドが静かに投げかけてきた「人間とは何か」という問い。そして、空飛ぶクルマが示した「空の移動」という新しい選択肢。これらは単なる見世物ではなかった。技術が社会にどう溶け込み、私たちの暮らしや価値観をどう変えていくのか、その「途中経過」を見せる試みだった。

～理想と現実のあいだで露呈した課題～

一方で、手放しに称賛できない現実があったことも記しておきたい。スマートフォンを介した予約システムは、多くの来場者にとって高い壁となった。「未来社会の実験場」を謳いながら、その入口が最も前時代的で使いにくい、この皮肉はDXを推進する日本社会全体への重い宿題として残ったはずだ。猛暑の中での行列、移動の不便さ、体力的な負担。スタッフの立場としても、ホスピタリティや運営設計の難しさを痛感せざるを得なかった。制度は整っても、現場は思い通りに動かない。現場の工夫があっても、制度が追いつかない。「実験場」であることの意味と限界が、ここに凝縮されていた。

～祭りのあと、夢洲はどこへ向かうのか～

会期が終わり、夢洲は再び静けさを取り戻した。多くのパビリオンや大屋根リングの大部分は解体される運命にある。しかし、夢洲の物語はここで終わらない。この地は今後、カジノを含む統合型リゾート(IR)開業に向け、さらなる開発が進む。万博のために整備された地下鉄やインフラは、国際観光拠点への動脈として生き続ける。「万博はIRへの地ならしだった」という批判的な見方があることも事実だ。だが、半年間でこの人工島に集まった数千万人のエネルギー、子どもたちが最先端技術に触れて抱いた未来への憧れ、企業や研究者の間に生まれた新たなつながり、それらは数字や建造物では測れないレガシーとして残っていくのではないだろうか。

～未完だからこそ残ったもの～

不満もあった。疲れも残った。それでも、大屋根リングの下で見上げた空の青さと、確かに胸の奥に芽生えた未来への微かな高揚感は、今も記憶から消えない。大阪・関西万博は、完璧なイベントではなかった。だからこそ私たちは、「次の未来をどう設計するのか」という問いを突きつけられたのだと思う、行政として、社会として、そして一人の人間として。準備から万博開催と閉幕の約2年携わって思う事は、この万博は、完成された答えではなく、考え続けるための未完のキャンバスだったように思う。



7. 今後の予定 (2026年1月～6月)

・ 主な学校行事

- ◆ 2026年3月6日(金) 卒業式
- ◆ 2026年4月7日(火) 入学式(予定)

紫明会HP  <https://sagikoshimeikai.com>



鷺宮高校HP  <https://www.metro.ed.jp/saginomiya-h>

・ 紫明会の主な活動予定(今後、変更する場合があります)

- 2026年 1月10日(土) 午後2時～: 役員会(鷺高会議室)
- 2026年 2月 7日(土) 午後2時～: 役員会(鷺高会議室)
- 2026年 3月21日(土) 午後2時～: 役員会(沼袋区民活動センター)
- 2026年 4月25日(土) 午後2時～: 役員会(鷺高会議室)
- 2026年 5月 9日(土) 午後1時～: 総会・懇親会(鷺高大会議室)

*** 緑化支援の活動日は不定期ですので、紫明会又は役員にお問い合わせください。**



クラス会、部活のOB, OG会等の同窓生の集まりや活動などの情報(開催予定や実施報告等)をお寄せ下さい。ご相談の上、紫明会HPに掲載致します。

寄付のお願い

今後の紫明会活動の推進のため、大変心苦しい限りでございますが、皆様よりご寄付を賜りたくお願い申し上げます。出費多端な折、甚だ恐縮ではございますが、会員各位、皆様にご理解とご賛同を頂き、ご厚情を賜れば有難く存じます。寄付金は随時受け付けておりますので、下記アドレス宛にご連絡頂ければ、専用の振込用紙(手数料不要)を郵送致します。

会長 芳賀 浩(昭和40年卒)  info@sagikoshimeikai.com

寄付の事情に関するお知らせは、令和6年(2024)末に紫明会HPの以下のURLに掲載しましたので、ご覧ください。

https://sagikoshimeikai.com/?page_id=639



*** 本年度は、同窓生の方々から多額の寄付金を頂戴致しました。お陰様で本年の鷺高祭や緑化支援に伴う諸経費をまかなうことができました。改めて、皆様のご協力に感謝致すとともに、引き続きのご協力を賜りたくお願い申し上げます。**